

# 「残唐五代史演義」における黄巢物語について

荒 木 猛

〔抄 録〕

明末に出版された小説「残唐五代史演義」は、五代・宋以来の永い間に亘る伝説話の集大成されたものであった。なかでも黄巢に関する話は、黄巢が宝剣を得て力を得、宝剣を失って落命するという特徴的なものである。この話は、「五代史平話」や「目蓮三世宝卷」にも収められている。しかし、三書における黄巢物語は微妙に異なる。

小論では、まずこの三書における黄巢物語の差異について考察

し、このような黄巢物語はどのように作り出されたか、唐末五代より宋にかけての筆記小説の類よりこれを追跡し、最後に、この黄巢物語の意味について考察した。

キーワード 残唐五代史演義、黄巢物語、宝剣と僧侶、

伝説形成

## はじめに

所謂、黄巢の反乱は、唐第十八代皇帝僖宗の乾符三年（八七六）におこり、中和四年（八八四）六月雁門節度使李克用を中心とする官軍に追われ、山東泰山附近の狼虎谷で黄巢が自刎して絶命することで終束する。この間、応明元年（八八〇）十二月に、五十万の兵を率いて都長安に入り、僖宗帝に代って自ら皇帝となり、国号を齊、年号を金

統と称したが、この黄巢の天下も三年とは続かなかった。

その後、かつて黄巢の部下だった朱全忠が唐に代って天下を取り後梁という国を立てたのを皮切りに、李存勗の後唐・石敬瑭の後晋・劉知遠の後漢・郭威の後周と五つの短命王朝がめまぐるしくかわり、これを五代と称する。この後、後周朝で近衛軍の長官であった趙匡胤が天下を取るや、ようやく安定し、ここに南北両宋約三百年間の天下が開かれることとなった。さて、北宋の都汴京や南宋の都臨安の

盛り場では、さつそくさきさきの五代で活躍した英雄豪傑に関する話もおもしろく語ってきかせる講釈が人々の関心をひき付けていた。孟元老の「東京夢華録」巻五によれば、北宋の都汴京の盛り場では、尹常売ウシノガイという「五代史」を語る講釈の専門家の居たことがしるされている。

恐らくその中で黄巢のことも語られていたであろうが、今はそれがどのようなものであったか手懸りは皆無である。しかし、この五代に関する講釈が今に残る「三国志演義」や「水滸伝」などと恐らく同じような経過をたどって明代になって小説本となったと考えられる。それが「残唐五代史演義伝」である。この小説では、極端に李存孝という一人の英雄豪傑の活躍を中心に構成されているので、いきおい人々の関心は李存孝に向いがちであるが、この李存孝の前に登場する黄巢にも李存孝に負けじと劣らぬ興味尽きない話が見られる。

本稿では、黄巢の反乱が終束したのち、黄巢に関して一体どのような伝説話が生れ、そしてそれがどのようにして「残唐五代史演義伝」に見られるようなものになったのか、主にこれを、五代・宋の筆記小説などよりたどり、かつ、そうした伝説話が生れた意味について考えてみたいと思う。

## 一、黄巢物語の概要

かつて橋本堯氏が分析されたように、「残唐五代史演義伝」（以下これを「演義」と略称する）は、「五代史平話」（以下これを「平話」と略称する）をもとにして作られた小説ではなく、まったく別系統に属

する小説だというのが今は定説になっている<sup>①</sup>。黄巢に関する話も両書の間で微妙に異なる。

また以上の両書のほかに、これはその成立時期が不明だが、「目蓮三世宝卷」（一名「黄巢宝卷」、以下これを「宝卷」と略称する）というものがあり、この中にも黄巢に関する話が収められている。従って併せてこれも見てみたい。

まず「演義」中の黄巢物語の方から見てみよう。

1、塩商の黄宗旦の妻は、妊娠して二十五ヶ月目によく一男子を産み、しかもその赤児の醜悪な顔つきに驚き、父宗旦はこれを近くの樹林の鳥の巢の中に棄てる。後に宗旦がこの樹林の近くを通りかかった時、その赤児がまだ生きていたのを発見し、拾ってきてこれを育てる。（三二回）

2、成人した黄巢は、上京して武拳試を受験するが、顔が醜いということで落弟の憂き目にあう。失望した彼は、ある酒館で酔いにかか

せて壁に反詩を書き、これがもとでお尋ね者となる。（三三回）  
3、長安城外の藏梅寺の住職法明長老は、ある夜現われた二匹の鬼より、間もなくこの世に黄巢という大賊が現われ、唐を倒し八百万人の命を奪うが、「その前にあなたがまず彼の剣によって血祭りにあげられる」と告げられる。（三三回）

4、果して後、黄巢が当局からの追及を逃がれて藏梅寺にやって来る。黄巢は、ある夜寺の後園で一人の仙女より一ふりの宝剣を授かる。

（四回）

5、黄巢はある日、自らの意に反し、大樹のウロに隠れていた法明長

老を、かの宝剣で斬り殺してしまふ。(四回)

6、その後、黄巢は太行山に登つて朱温らと合流し、やがて長安に攻め入り都より僖宗帝を追い出し、自ら皇帝となり、国号を齊、年号を金統とする。(五回)

7、ある日黄巢は、長安の街を闊歩していると一人の道人より宝剣の返却を迫られる。気が付くとそれまで腰にさしていた混唐宝剣がなくなつており、道人の姿も見えなくなつていた。(十八回)

8、後、晋王李克用の部下の李存孝の猛攻により、黄巢は都から追放され、さんざん逃げまわつたあげく、滅巢山まで来て観念し自刎して死ぬ。(二十回)

以上が、「演義」における黄巢物語の概要だが、一読して気付かれることは、酒館の壁に反詩を書くなど、プロットにおける「水滸伝」との類似であろう。

次に、「平話」中における黄巢物語を見てみよう。

1、塩商の黄宗旦は、妻が一つの肉球を産み落したので、これを不祥のものと思ひ、一時これを畑に棄てるも、後にこれを拾つて育てる。

2、ある日黄巢は、一道士より「桑門劍」という宝剣を授かる。

3、黄巢は、その後武学試を受験するも落第し、宋州の家塾朱五経の家にしばらく逗留し三人の息子達の遊び相手となる。

4、黄巢は、ある日狩りをし弓矢で一羽の雁を射ち落す。その雁の口ばしには「王仙芝の仲間に入るべし」と書かれた紙をくわえていたので、黄巢はこれを天の啓示とみる。

5、黄巢は王仙芝のもとにむかう途中、尚讓や王璠さらにはかつての

朱五経の息子の一人の朱温らを仲間に加え、ともに王仙芝の反乱軍に参加する。

6、黄巢は、仲間とともに都に攻め入り、僖宗帝を追い出し、自ら皇帝となり、国号を齊、年号を金統とする。

7、皇帝となつた黄巢は、ある夜、西北から無数のカラスが飛んできて自分の冠をさらう夢を見る。醒めてから、これは李克用のカラス軍が攻めてくる予兆かと黄巢は警戒する。

「平話」では、話はこの後もつばら朱全忠のことに移つてしまい、黄巢がそれまで携えていた宝剣をなくしたとか、都から追われ、遂には自刎するに至ることに一切書き及んでない。

さて、この「平話」における黄巢物語は、「演義」のそれと比べて大部違ふことが判る。一番の違いは、黄巢が誤つて藏梅寺住職を宝剣で斬り殺してしまう一段が「平話」ではまったくないことである。また、「演義」で見られた「水滸伝」との類似点もここではまったく見られない。

ただ黄巢が異常に永い間母の腹の中にあつた後一個の肉球として産れた為、父親がこれを妖物と見做す個所は、「封神演義」を読んだ人ならすぐに「封神演義」十二回における哪吒誕生の一段に大變似ていることに気付かれるであろう。また、父親が産れた赤児を捨てる個所は、明、万曆刊の「三教源流搜神大全」巻五の「太歳殷元帥」の条に似ている。ここでは、肉球として産れ出たのは哪吒ではなく、殷の紂王と姜皇后との間に産れた殷郊のこととなつている。そしてこの殷郊の場合も、父紂王から不祥のものと見做され一旦郊外に棄てられるが、

金鼎化身中真人によつて拾われ育てられたことになっており、「演義」や「平話」中の黄巢物語にすこぶる似ている。

最後に、「宝巻」における黄巢物語を見てみよう。

- 1、目蓮は、阿鼻地獄におちている母に会つてこれを救わんが為に、錫杖で地獄の門を破り、八百万の孤魂をこの世に放出してしまう。その結果、目蓮は罰として一度死に唐末の黄巢に生れ変わり、反乱を通じて八百万の人間を殺すことでさきに放出した孤魂を再び地獄に回収することが宿命づけられる。
- 2、目蓮は、黄宗旦の子黄巢として生れ変わるも、その顔が醜悪だったので、一時父親より棄てられた後、また育てられる。
- 3、長安城外藏梅寺住職の了空和尚は、ある夜二匹の鬼より、間もなく黄巢が乱をおこし二百万人の人命を奪うが、まっさきに自分がその血祭りにあげられることになっていると告げられ驚く。
- 4、果して、ある日この藏梅寺に黄巢がやつて来たので、和尚は彼に命乞いをする、黄巢はけつして和尚を殺さぬと誓う。
- 5、ところが、黄巢はある晩寺の花園で一人の仙女より一ふりの宝剣をもらい、後にその剣で大樹のウロに隠れていた了空和尚を誤つて斬り殺してしまう。
- 6、やがて黄巢は、部下を増やし彼等を率い都長安に攻め込み、一時皇位につくも、その後李存孝の率いる官軍の猛攻をうけて、黄巢は都より逃げ出す。
- 7、逃げて鴉谷山まで来ると、黄巢の目の前に一人の男が立ちふさがつて、自分の剣を返せと言う。黄巢は腰の宝剣でその男に斬りかか

ろうとすると、その男の姿ばかりか手にしていた宝剣までもが瞬時に消える。そこで黄巢は死を覚悟し自らの首をくくると、その魂はたちまち次の長安市内の某屠殺業の息子として再生する。

以上、概要を見てわかる通り、この「宝巻」における黄巢物語は、「平話」のそれより遙かに「演義」のそれに近い。なによりも、黄巢と宝剣の転末がほとんど同じであることがこれを印象付ける。また、藏梅寺を詠んだ七言詩もまったく同じであるほか、黄巢が誤つて寺の住職を殺してしまったあとの七言詩も大変似ている。ただ住職の名前が、「演義」では法明長老なのに対し、「宝巻」の方は了空和尚となっている違いはある。また「演義」では、酒館の壁に反詩を書くとか、太行山に登るといった「水滸伝」的要素が見られたが、「宝巻」ではこれらの要素は一切なく、かわりに、宗教書らしく黄巢が反乱をおこして八百万人の人命を奪つたのは、彼が前世で誤つて八百万の孤魂を地獄から放出した償いであるとする因果を説いている。このような違いがあるにせよ、やはりこの「演義」と「宝巻」の黄巢物語に似ている点のあるのは、どちらかがどちらかを踏襲した為かと思われる。「宝巻」もその源をたどれば古い話に由来するのかもしれないが、現存する「宝巻」はみな清末のものばかりであるので、「宝巻」の方が「演義」中の黄巢物語をとり入れた可能性が大きいと考えるべきであろう。<sup>③</sup>

以上、「演義」「平話」「宝巻」における黄巢物語を概観した。この三書の物語に共通するのは、黄巢と宝剣に関する荒唐な話だったが、これらの物語にはこのほかにも荒唐無稽な要素が多く存する。

まずその第一は、「演義」六回で、僖宗とその側近らは黄巢退治の人材を協議した結果、沙陀族の長李克用が最適任ということになり、この李克用を呼びよせる為に吏部尚書の程敬思が天子の詔勅をもって克用のもとに行くように書かれてあるが、この程敬思なる人物は虚構の人物である。

「新唐書」卷二一八沙陀伝によれば、

(黄巢攻潼関、入京師、詔河東監軍陳景思、発代北軍。……有詔、李克用代州刺史、忻代兵馬留後、促本軍討賊。……)

とある。これによれば、黄巢退治に力を借すよう天子の詔をもつて李克用を説得しに行ったのは、河東監軍の陳景思という人であったことが判る。因みに、元の戯曲の無名氏作「李嗣源復奪紫泥宣」や、陳以仁作「雁門関存孝打虎雜劇」では、どちらも陳景思が沙陀の李克用のもとに説得にゆくというふうに史実に忠実な人名になっている。しかし民間説話では、いつの間にかこの陳景思が程敬思になったものと推測される。

第二は、「演義」二十四回で、黄巢らが官軍に追われて滅巢山まで来た時、その地名を聴いてここが自分の死に場所と思つた黄巢が自刎して果てるとしているが、この滅巢山という地名もまた当然虚構である<sup>④</sup>。では実際に黄巢が自刎して死地に赴いたのはどこだったかと言え、  
「資治通鑑」卷二五六によれば、

中和四年六月、……甲辰、武寧將李師悦与尚讓追黄巢至瑕丘、敗之。巢衆殆尽、走至狼虎谷、(胡三省注)狼虎谷、在泰山東南萊蕪界。  
丙午、巢甥林言斬巢兄弟妻子首、將詣時溥。……

とあり、これによれば、黄巢は泰山東南の狼虎山中で自刎し、甥の林言が介錯したのである。

また第三。「演義」の三回四回に藏梅寺という寺が出てくる。陶君起編「京劇劇目初探」を見ると、京劇のうち唐宋五代のことを扱った劇目の一つに、「祥梅寺」というものがあると<sup>⑤</sup>する。しかし、この藏梅寺とか祥梅寺というのも虚構の寺名のように、清・徐松の「唐函京城坊考」を見ても、この寺名は出てこない。

以上、要するに「演義」に見える黄巢物語が、いかに史実から離れた話であったかが判つたと思う。では次に、一体このような荒唐無稽な黄巢物語がいかにして発生し、かつこの物語にいかなる意味があるかを、次節で考えてみたい。

## 二、五代・宋における黄巢伝説

さて、前節で見たように現存する「平話」「演義」「宝卷」における黄巢物語にはいずれも宝剣が登場したが、そもそも中国人にとって、宝剣とはいかなるイメージを伴つたものであったのであろうか。

福永光司氏の研究によれば、中国においては古代より、剣や鏡を単なる実用の器物とのみ見ることはせず、多く道家の神仙思想とも融合して、これら剣や鏡を帝王の権力の象徴とする考えがあり、特に剣を神秘化する思想は呉越の地にひろまり、事実、これらの土地のことを識した「呉越春秋」とか「越絶書」などという書の中に少なからぬ剣に関する神秘的な話が載せられていると指摘されている<sup>⑥</sup>。福永氏の方

析は古代より六朝あたりまでであるが、では黄巢の活躍した唐末では、人々は宝剣に対してどのような考えをもっていたであろうか。結論から言えば、依然根強い宝剣の靈力に対する信仰にも近い考えが存在していたようだ。一例を挙げるならば、黄巢の反乱時にこれを取り締る立場にあった節度使の一人に高駢という人（『旧唐書』卷二八二、「新唐書」卷二二四下）がいる。彼は、八七八年に鎮海軍節度使となつて黄巢を嶺南に追放したが、その後黄巢の北上を阻止することに失敗した男である。彼は呂用之らの妖術を信じ、奢侈を極め政治を乱した廉で、八八七年内で秦彦らに殺されている。この高駢について、「資治通鑑」卷二五四を見ると、次の話が収められている。

有蕭勝者、賂用之、求塩城監。駢有難色、用之曰「用之非為勝也。近得上仙書云、『有宝剣在塩城井中、須一靈官往取之。』以勝上仙左右之人、欲使取剣耳。」駢乃許之。勝至監数月、函一銅匕首以献。用之見、稽首曰「此北帝所佩、得之則百里之内五兵不能犯。」駢乃飾以珠玉、常置坐隅。

つまり高駢は、その剣を身に佩びれば百里内の敵のさまざまな武器から身を守ることができるという宝剣を手に入れる為に、蕭勝という男に塩城の監という役職を与えたというのである。高駢はその剣を手するや大事に扱っていたというが、果してその宝剣に呂用之が言ったような効めがあったかどうかはわからない。しかし、彼はこの世に不思議な靈力を有する宝剣というものが存在するとする考えを持っていたことがここには見られる。

今の例は史書中のものであったが、では戯曲小説中では、どうであ

ろうか。明初の作とされる無名氏の戯曲「劉知遠白兔記」（六十種曲「所収」）中の、後に五代後漢の皇帝となる劉知遠にも、これと似た話がある。

その概略を言うならば、劉知遠は幼い頃に李文奎という人の下僕となるが、やがて認められて娘の李三娘と結婚する。ところが、間もなく義父が亡くなると、いつも義兄から虐待されるようになる。ある日知遠は義兄より瓜園の管理をまかされる。夜中、瓜の妖精が現われ知遠と闘つて敗けるや地中に没する。知遠はその没した所を掘ると、一石匣を得る。その中には、甲冑、兵書に宝剣があつた。知遠は、この後太原の募兵に応じたのをきっかけにとんとん拍子に出世し、遂には皇帝にまでなるといふ筋である。

この雜劇に見える宝剣は、後の皇帝の將來を知遠に保証するものとして用意された一つのしかけと考えられる。そして、やはり宝剣に特殊な靈力を認める考えがベースとしてある。

では次に、黄巢の反乱が終息してから、黄巢に関しいかなる伝説が生れたか見てみよう。黄巢の反乱が終つて間もない頃から、すでに各種の黄巢に関する伝説が生れたようである。管見の及ぶ所、それは凡そ次の二種の伝説に大別される。

その一は、黄巢が狼虎谷で死なず、僧となつてこっそり生き延び、それまでのことを総括する詩一首を作つたというもので、例えば、南宋の呉曾の「能改齋漫録」卷八によれば、次のように見える。

唐黄巢既敗、為僧、投張全義、舍於南禪寺。有写真絹本、巢題詩

其上云、

猶憶当年草上飛 鉄衣脱尽掛僧衣

天津橋上無人識 独倚欄干看落暉

また、南宋・王明清の「揮塵後録」巻五や、同・趙与時の「賓退録」巻四、同・羅大経の「鶴林玉露」巻二にも、ほぼ同様の記事があるが、特に「賓退録」では、黄巢作とするこの詩は、実は元積が智度禪師に贈った二首の詩を合せて一首にしたものであることを指摘する。また、清の楮人獲の「堅瓠四集」巻二や、「全唐詩」巻七三三にも、同様の記事と詩をのせる。さて、これらの記事の源は、どうやら北宋の人陶穀の「五代乱離記」のようであるが、惜しいことに、この書は今は散佚して現存しない。だがともあれ、この種の伝説は現存する黄巢物語に採用されることがなかったので、この系統の伝説については、これ以上追求しない。

これに対する今一種の伝説は、宝剣・妖術さらには黄巢廟に関するものである。

まず「太平広記」巻二八七を見ると、唐末の頃、汴中に紙に画いた兵馬を呪文を唱えることで実際に動かす妖術をやつる功德山という妖僧のいたことを記している。この功德山の画いた兵馬は、往々人家に押し入って悪さをしたので、汴中の人々は夜も安眠できなかった。時に、中書令の王鐸が計を設けてこの功德山ならびに彼を慕う僧数千人を捕えて尋問したところ、すべて黄巢の仲間であることが判明したとする。この記事は、王仁裕の「王氏見聞記」からの引用となつてゐる。王仁裕は、唐末から五代を生きた人であるから、黄巢の反乱からあまり時間が経つてない頃に、すでに黄巢の仲間に妖しげな術を駆使

する僧達が参加していたという民間伝説があつたことが窺われる。

これに対して、黄巢を祠つた廟についての各種伝説も作られたようである。南宋の人洪邁の「夷堅志」支乙巻五にこの種の伝説が一つ記録されている。それによると、その伝説というのが、柳州宜章県の黄沙峒の山頂に、いつ誰が建てたかわからない黄巢廟があつて、時折この廟より、頭目らしき者の命令する声と、これに呼応する数百人の部下の声とを麓の村人達がよく耳にしていた。淳熙年間(南宋の年号で、一二四一〜一二五二)、湖南の帥の王宣子が部下の楊欽に命じて、その廟に火箭を放ちて焼やさせ、あたりの樹木も伐採させたところ、廟の焼けあとより長さ一丈ばかりの黒の大蛇が現われ、楊欽の兵達に襲いかかるうとしたので、兵達は弓矢でこれを射殺した。その後は、山上よりの不気味な雄叫びは絶えて聞かれなくなつたというものである。これとよく似た話が、「元末明初の人陶宗儀の「輟耕録」巻七に見える。それに依れば、福建省のある貧しい樵夫が、ある日山中で一匹の白蛇に出会つて驚き逃げ、家に帰つて妻にそのことをしゃべつたところ、妻はその白蛇は宝物の変化したものに相違ないとして、夫とともに再び蛇に出会つた所にむかう。すると、先刻の蛇がまだそこにいて、二人を更に奥に導きある巖穴の所で姿を消した。夫妻はその巖穴を啓くと一つの石が出土した。しかもそれには名前や年月、花押などが刻されていた。そして、その名前などよりして、それが黄巢の墓であることが判明した。その墓をなおも掘ると、中から金甲の他に無数の金銀財宝が出てきた。かくしてかの夫妻は、にわか大尽となつた。それで、近所の人々は、夫妻が盗みでも働いてこうなつたのではと疑い、

このことを役人に話した。すると役人は、夫妻を捕えて厳しくこれを追求した。夫妻は当局の追求に耐えきれず、遂にかの黄巢の財宝のすべてを某大尽の手にゆだねることとした。するとその大尽は、役所の上下に賄賂をばらまいた為、夫妻への当局の追求は一旦は消えた。しかし後に、福州路帥府の一役人がこのことを嗅付けまた追求しだした。大尽はやむなくこの役人に金甲を贈って口封じを計った。その後この役人は、別の所に転勤したが、かの金甲を家宝としていつもベットの下に隠していた。ある日ベットの下から風のような音がしたので、鍵を開いて籠の中を改めると、金甲はなくなっていたというものである。

この話は、さきの「夷堅志」中の黄巢廟の話と、(1)、ともに巨蛇が廟とか墓を守っていたとする点、(2)ともに南方の土地での話である点で共通する。どうやら、宋元の頃、南方の広西とか福建といったかつて黄巢ら反乱軍が通りすぎた土地のあちこちに、黄巢の廟とか墓にまつわる伝説が作られたようである。宋の王明清の「揮塵後録」巻五では、先に述べたように、黄巢が狼虎谷では死なず僧となつてこつそり生き延びたことを述べたあとで、「僧史」の記事を引用して、黄巢の墓は、寧波の雪竇山山頂にあるとする。

ところで、同じこの「揮塵後録」巻二に、宋代における黄巢物語を考える上で極めて興味深い次のような記事が見える。

(王)明清家有「統皇王宝運録」一書凡十卷。(中略)其載黄巢王氣一事、尽存旧詞、姑綴于編。中和三年夏、太白先生自号太白山人、不拘礼则又云姓王、竟不知何許人也。金州者宿云「每三年、見入州市一度自見。」此先生壳業、已僅三十四年、顔貌不改不老。其

年夏六月三日、太白山人修謁金州刺史檢校尚書左僕射兼御史大夫崔堯封云「本州直北有牛山。傍有黄巢谷金桶水。且大冠之帥黄巢凌邕州県、盜據上京近已六年、又偽国大齐、年号金統。必慮王氣在此牛山。伏請聞奏蜀京、掘破牛山則此賊自敗散。」堯封聽之大喜。且具茶菓与之、言話移時。太白山人礼揖而去。堯封遂与州官商量、点諸農峯丁男、日使万工、掘牛山。一箇月余、其山後崖崩十丈以来有一石桶。桶深三尺徑三尺。桶中有一頭黄腰獸。桶上有一劍長三尺。黄腰獸見之乃喞然数声自撲而死。堯封遂封劍、及画所掘地图、所見石桶事件聞奏。僖宗大悦、尋加堯封檢校司徒封博陵侯。黄巢至秋果衰、是歲中原尅平如昭洗。(以下略)

つまり、黄巢らが都で跋扈していた中和三年に、金州の人で太白先生という者が、州北の牛山に黄巢の谷、金桶の水という所があり、ここに黄巢の王権の由来する源があるに相違ないから、それを壊せば、彼等の力も自から衰えるでしょうと、お上に訴え出た。これを聞いた崔堯臣という役人が、人を使って牛山を掘らせたところ、果して一つの石桶が掘り出され、その上に一ふりの劍があり、また桶の中より黄腰獸が出てきて死んだ。その年の秋より果して急に黄巢の力が衰え、中原の地がもとのようにすっかり平定されたというのである。

この話に依れば、黄巢が保持していた王権はこの石桶の上の劍なし桶中の黄腰獸に由来するとしているかのようである。

この記事は、さきに紹介した宝劍の靈力を信じた高駢という節度使の話とともに、同じく劍に何がしかの靈力を認めようとするもので大変興味深い話である。また桶の中から出てきた黄腰獸は、すでに見た

黄巢廟や黄巢墓の話の中に出てきた巨蛇をも連想させる。

この「揮塵後録」の話が、後世の「平話」や「演義」に見える黄巢物語となにか関連があるかと言われれば、そのような証拠は無論ない。第一「演義」においてのように黄巢が仙女ないし道士から宝剣をもらうことによつて反乱を起こし、後に道士からその返却を求められて天子の座から追われるという話とは、この話は程遠い。しかし、一つの可能性として、尹常売ら宋代の五代史語りの講釈師が、この「揮塵後録」の話ないしこれに類した話をネタにして、黄巢が宝剣を得て力をもち、宝剣を取り上げられてその力を失うというおもしろい話を作り出したとは考えられはしまいか。更に想像を逞しくすれば、このような宋の講釈師の語つた黄巢物語が、丁度「水滸伝」がそうであつたように、時代が下るにつれ雪だるま式に大きくなり、明代の「演義」へと伝えられたのではあるまいか。

この間の事情を今に伝える資料が圧倒的に不足しているので、このような推測しか指摘できないのは残念だが、五代宋元を通じて黄巢に関する伝説のうち、唯一今の「演義」に見られる黄巢物語に近いのが、この「揮塵後録」の話なので、筆者はこの記事を重視したい。

### 三、宋元明における黄巢物語

本節では、宋代の講釈より、明代の小説に至るまで黄巢物語に関し、てまとめてみる。

まず、北宋の都汴京の盛り場では、「五代史」語りを専門とする講

釈師がいた。孟元老の「東京夢華録」では、尹常売という「五代史」語りの講釈師のいたことを記し、また羅燁の「醉翁談録」甲集卷一舌耕紋引、小説開闢の条では、講釈師の中には「黄巢の天下を撥乱せるを説ける」者のあつたことが書かれてある。

また、南宋成立元代増補したものとされる「五代史平話」<sup>(6)</sup>が出現した。但し、現存するものは、その残欠本である。一方、北方の金では演劇が好まれたようで、盛んにその脚本たる院本が作られた。その中には五代史を題材とした院本も少なくなく、曲目のみではあるが、陶宗儀の「輟耕録」卷二十五を見ると、断朱温爨、打虎艶、破巢艶、黄巢、史弘肇、などという五代史劇劇目が挙げられている。

また、同じ金において、「劉知遠諸宮調」が作られた。話は、五代後漢の皇帝劉知遠と皇后李三娘との出世物語である。

元代になると戯曲が大いに作られたが、その中で五代史に関するものとしては、次のようなものがある。

一、閔漢卿撰「鄧夫人苦痛哭存孝雜劇」

二、陳以仁撰「雁門関存孝打虎雜劇」  
(以上「元曲選外編」所収)

三、無名氏撰「庄関楼疊掛午時牌」

四、無名氏撰「李嗣源復奪紫泥宣」

(以上「孤本元明雜劇」所収)

五、白樸撰「李克用箭射双鵬雜劇」

(曲辞の一部のみ明・正徳年間刊行の「盛世新声」に残存)以上五種が残存するが、この五種のうち一本として黄巢をネタにし

たものではなく、圧倒的に李存孝を主役にするものが多い。これは丁度水滸戯曲において李逵を主役にするものが多いのに似ている。とも角、元代における李存孝人気がうかがえる。

元代南方の地では南戯という戯曲がはやっていった。その脚本たる戯文の一つに「史弘肇故郷宴」というものがあったことが、明、徐渭の「南詞叙録」に見える。しかし、これはさきに挙げた院本と同様、題目だけで戯文そのものは残っていない。

元末明初になると、同じ南戯に「劉知遠白兔記」が出た。「六十種曲」所収の同戯を見ると、これは「劉知遠諸宮調」の翻作と言っているほど基本的筋立ては同じである。また、同じ元末明初の人だといわれている羅貫中が「演義」の作者だと伝えられている。しかし、羅貫中自体いまだ不明の人であるし、よしや彼が「演義」を作ったにしても、明末に「演義」の活字本が出るまでどれだけの人の手が入っているかわからず、彼の書いた「演義」が現存本と同じものであったとしても思えない。

明・成化年間になると、所謂「成化説唱詞話」の中に、「石郎駙馬伝」という後唐の廢帝が永寧公主を虐待したことから石敬瑭の叛乱をまねき、結局敬瑭が後晋の皇帝になるという詞話（「演義」の四十五回（五十回の話に相当）がある。無論、黄巢物語とは直接関係しない。明・正徳年間には、「金統残唐記」なる小説があったようである。

このことは、よく引用される資料であるが、錢希言「桐薪」巻三に見え、

「金統残唐記」載黄巢事甚詳。而中間極誇李存孝之勇、復称其冤。

為此書者、全為存孝而作也。……

とある。この書名の金統とは、黄巢の建てた大斉国の年号であり、「黄巢のことを載すること甚だ詳し」とある所からして、恐らくこの小説本は、宋代以来の黄巢物語が集大成されたもので、かつまた「演義」の前身のような作品であった可能性が高いが、大変残念なことにこの小説は、明末の頃すでに散佚してしまったようである。

次の嘉靖年間には、晁瑛の「宝文堂書目」が出ているが、その中を見てみると、その頃天下に通行していた五代史に関する話本小説とおぼしきものとしては、

一、唐平黄巢、二、存孝打虎、三、五代残唐記、四、李唐五代通俗演義の四種のもが見える。筆者は、このうちの「五代残唐記」に注目する。なんとすれば、この書名のうち「五代」の二字を「金統」に改めると、「金統残唐記」となり、この「五代残唐記」は、ひよつとしてさきに紹介した「桐薪」で書かれていた「金統残唐記」と同一書だったかもしれないからである。もつともこの両書のどちらも今に伝わらないので、これはあくまで推測にすぎない。

万暦年間になると、通俗小説をよく刊行した書肆熊大木が「南宋志伝演義」を出している。ただこれは、五代後晋の石敬瑭から話を始め、趙匡胤が宋の太祖に即位するまでのことが書かれており、勿論黄巢物語とは直接関係しない。

さて、現存する「演義」本が出版されたのは、明末の天啓年間のことと考えられる。なんとすれば、現存する「演義」本の最古の版本は蘇州の書肆周之標が刊行した八卷六十則本であるが、彼女は主に天啓

年間に多く出版物を出しているからである。<sup>19)</sup>

以上、宋の講釈から明代の小説「演義」の出現までを概観してみたが、残念ながら、今見てきたように、五代宋の筆記小説に見える黄巢伝説と宋代講釈の「五代史」語りとの関係、それに宋代講釈と現存する小説「演義」との関係をあつとずける資料がほとんどなく、従つて、正確な所は不明であるというのが現状だと言わねばならない。

次に、「演義」等に見られる黄巢物語の意味する所について考えてみたい。

まず、黄巢が宝劍を得て力を持ち、宝劍を失つて落命に至るといふ、黄巢と宝劍とのむすびつきは、何を意味するのであるうか。これはやはり、さきにも触れたように宝劍を帝王権力の象徴とする伝説的考えに基づくならば、黄巢が宝劍を得て一時的であれ天子の位に即き、それを失つてその座から追われるという考えによつたものであることは明らかであろう。ただ、「平話」にあるように、肉球として産れたとか、母が妊娠二十五ヶ月目にしてようやく出産したところ、産れ出た子は並はずれて醜い男の子だつたとしているのは、彼が将来特異な人物に成長する予兆として設定したと考えられるもの、劉知遠や錢鏐のように、時折人に蛇や蜥蜴の幻覚を与えた<sup>20)</sup>とまでは書かれておらず、このことは、黄巢は結局のところ劉知遠らのように真の皇帝になりえなかつたからと思われる。

最後に、黄巢が反乱を起す時に、これは意図したものでないといふのが結果的にまず寺の住職を血祭りにあげることになつてゐるが、これは一体何を意味するのであるうか。

あるいはこれには深い意味があるのかもしれないが、一応筆者の考える所を述べるならば、そもそも無辜<sup>ムコ</sup>の人を殺すこと自体罪深い行為だが、たとえ意図的ではなく誤つてであつても、仏に仕え人々から敬意を持たれてゐたであろう寺の高僧を血祭りにあげることが、更に罪深く、容易に神仏の怒りをまねく所業であることがまず考えられる。黄巢の場合、往々神仏をも恐れぬような残酷な行為が多かつたのではないか。この黄巢のとつた残酷な行為の一つの象徴として、小説では寺の住職を血祭りにするという話を作り出したのではないか、というのが筆者の考えである。

實際、史書をひもとくと、黄巢に目を覆いたくなるような残酷な行為のあつたことが随所に記されている。二三の例を挙げるならば、一、応明元年、黄巢が都から僖宗帝を追い出し、自ら皇帝を名乗るが、翌年の四月には早くも都の四方を官軍に包囲され一時都から脱出する。しかし間もなくまた都に戻るや、官軍を都より追い出した後、今回官軍に協力した者を皆殺しにするという残酷な行為をしている。事は、「新唐書」卷一五〇黄巢伝に次のように見える。

巢復入京師、怒民迎王師、縱擊殺八万人、血流於路可涉也。謂之「洗城」。

二、中和三年になると、李克用が軍を進めて長安を攻めたので、黄巢は遂に城を捨てて逃げ、藍田から蔡州へと逃げまわり、陳州まで来た頃には食糧も尽きはたので、生きてゐる人を捕えては、生きてままこれを碾<sup>ひ</sup>き臼<sup>うす</sup>に入れ碾<sup>ひ</sup>いて骨ごと食べたとされる。

賊掠人為糧、生投於確磧、併骨食之、号給糧之処曰「春磨寨」。

（「資治通鑑」卷二五五）

これは、まさに「殺人如草」の所業といえるであろう。このような黄巢による残酷な行為が、その反乱が平定された後も人々の脳裏に永く残り、いつ頃からか黄巢がこともあろうに一人の高僧を血祭りにしてから反乱を起こしたという話になったものと推測するのである。

まとめ

以上、「残唐五代史演義伝」における黄巢物語について、まず「五代史平話」や「目蓮三世宝卷」に見えるものとの比較を行い、次に、五代宋における筆記小説から黄巢伝説をさぐり、最後に、黄巢物語の意味する所を考えてきた。

「演義」等における黄巢物語に特徴的なことは、黄巢が宝剣を得て力を持ち、宝剣を失って落命するというものであった。一方、五代宋における筆記小説の類を調べると、黄巢に関する各種伝説があり、しかもそれが黄巢の反乱が収束して間もない頃よりすでに作られ始めたことが判った。中でも、黄巢の谷より宝剣を掘り出すことによつて黄巢の王気を削ぎ、遂には彼を都から追い出すことに成功したとする「揮塵後録」の記事などは、これが後の黄巢と宝剣の話に発展する材料の一つであった可能性があると筆者は考えるものである。

古来、特に揚子江下流域では、宝剣を単なる実用的器用とのみ見ないで王権のシンボルと考えてきた。黄巢物語の場合も、黄巢が宝剣を入手するもやがてこれを取り上げられるのは、彼が歴史上真の皇帝になれなかったことを意味していると考えられる。また、反乱軍拳兵に

先立ち、黄巢がまず寺の僧を血祭りにするという話についても、歴史上の黄巢に往々残酷な行為が多く、それら行為の一つの象徴として作りだされたのがこの話でなかったかと推測した。

以上で、「演義」等における黄巢物語の考察をおえるが、最後に気にはなつたが解決できず、つみ残すことになつたことを書いて擱筆したい。それは、黄巢伝説と僧侶との関係である。黄巢伝説にはいつも僧侶の影がつきまといつている。

一、黄巢がまず僧を血祭りにあげてから反乱をおこす。

二、これは後の黄巢物語にこそ組み入れられなかつたものの、黄巢伝説の一つに、黄巢が僧となつて生きのびたとするものがある。

三、「宝卷」では、黄巢を高僧目蓮の生れかわりだとする。

この黄巢伝説になぜかくまで僧侶の影がつきまとうのか、またその意味する所は本当の所何なのか。今回結局結論らしいものを見つけるに至らなかつたが、今後、何か新しい材料を得て、この問題の解明を期したい。

〔注〕

（一）橋本堯「残唐五代史演義論—英雄中心主義—」（『中国文学報』第二十二冊、一九六五年）

（二）今暫く、「水滸伝」との類似を指摘するならば、2で、黄巢が酒館の壁に反詩を書く一段は、「水滸伝」三十九回宋江が酔つて滯陽楼に反詩を書きのこすプロットに似ている。しかも、宋江の書いた語句の中に、「他時若し凌雲の志を遂げなば、敢て笑わん黄巢の丈夫ならざるを」の一句が見える。また、4で黄巢が仙女より宝剣を授かる所は、「水滸伝」四十二回宋江が夢の中で九天玄女より天書を授かる一段を

彷彿とさせるものである。更に6、黄巢が太行山に登り、すでにいた朱温ら百万人の仲間達より頭領に推される個所に至っては、「水滸伝」の前身の「大宋宣和遺事」で、李進義や晁蓋らが太行山に登る一段に似ている。

また、これは黄巢物語の範疇からはずれるが、「演義」十回における李存孝による虎退治の段は、明らかに「水滸伝」二十三回における武松打虎の段に極似する。なによりもこの両者に見える「古風詩」が文字が若干異なるのを除いて他ほとんど同じ詩が使われている。ついでに言えば、「演義」最終回末尾の詩は、「水滸伝」引首に引く邵堯夫原作の詩とほぼ同じである。

これまで、「演義」には「三国志通俗演義」中のプロットと類似する個所の多いことが指摘されてきた。例えば趙景深「残唐五代史演義」(「中国小説叢考」齐鲁書社、一九八〇年)や、沈伯俊「残唐五代史演義前言」(「明代小説輯刊」第三輯所収、巴蜀書社、一九九七年)しかし、こと黄巢物語に関しては、今見たように「水滸伝」との関係がことの外深い。このように「演義」と「水滸伝」とがプロットで類似する個所のあるのは、どちらかが他方を参照したことが考えられるが、共に宋の講釈以来の話柄で、明代小説になるまでに互いにプロットの借し貸りのあったことも考えられるので、どちらがどちらを参照したかは一概には言えない。ここは、プロット上の類似点のあるという指摘にとどめ、どちらがどちらを参照したかの詮索はしないこととしたい。

(3) 現存する最古の「目蓮三世宝卷」三卷は、李世瑜編「宝卷総録」一九六一年中華書局によれば、光緒二年(一八七六)鎮江宝善堂善書局刊本である。但し、筆者が依った「宝卷」は、「宝卷初集」一九九四年山西人民出版社所収のもので、封面上光緒二十四年(一八九八)新鐫とある。

かつて鄭振鐸は、この「宝卷」を「此本格式很古、似其出現乃在伝奇目蓮救母之前」と指摘した。「仏曲叢録」「小説月報」第十七卷号外所収)鄭氏がここで「伝奇目蓮救母」と言っているのは、具体的に

何を指しているのかはつきりしないが、もし万曆十年(一五八二)に鄭之珍の刊行した「目蓮救母勸善記」を指しているとするれば、鄭氏はこの「宝卷」の初出をかなり古いものと考えたことになる。しかし同氏が当該論文中で紹介した宝卷は上海翼化堂刊本だとしている。この上海翼化堂がいつ頃の書肆かと調べてみると、韓錫鐸等編「小説書坊録」一九八七年春風文芸出版によれば、同書肆から光緒三十四年序のある小説「金蓮仙史」を刊行していることが判った。つまり、上海翼化堂は清末における上海の書肆の一つであったわけで、鄭氏の手に行っていた「宝卷」もやはり清末のものだったということが出来る。

(4) 陶君起編「京劇劇目初探」(一九六三年中国戯劇出版社)頁一八一によれば、京劇の劇目に「落巢山」というものがあるとのことだが、この山名もやはり虚構である。

(5) 「京劇劇目初探」頁一七九、祥梅寺の項には、唐僖宗時、祥梅寺僧了空因大殿灯油常被竊去、暗中窺伺、見二鬼偷油、出而質問、二鬼答以黄巢起義、首斬了空。了空大惧、会黄巢至、了空哀免。黄巢嘱于起兵時隱匿、勿為部下搜得。黄既起兵、了空藏于樹窟中、黄搜僧不得、斬樹開刀、恰將了空殺死。とあって、この劇がほぼ「演義」や「宝卷」と大同小異の筋立てをもつ劇であることが判る。

(6) 福永光司著「道教思想史研究」一九八七年岩波書店、第一節「道教における鏡と劍」を参照のこと。

(7) 陶穀は、「宋史」卷二六九によれば、開宝五年に六十八才で没とあるので、彼の生没年は、九〇二年から九七〇年となる。つまり、唐末から宋初にかけて生きた人となる。また、黄巢が僧となり詩を詠んだとする記事の源が陶穀の「五代乱離記」であることは、王明清の「揮塵後録」や、趙与時の「賓退録」の他に「全唐詩」にも見える。

(8) 「太平広記」卷二八七、功德山の条、「唐巢寇将乱中原。汴中有妖僧功德山。遠近桑門皆歸之。至於土庶、無不降附者。能於紙上画神寇、放入人家、令作禍祟、幻惑居人、通宵繼昼、不能安寝。或致人疾苦。(中略)公私頗患之。時中書令王鐸鎮滑台。遂下令曰、「南燕地分有

災、宜善禳之。遂自公衙、至于諸軍營、開啓道場。延僧數千人。僧數不足。遂牒汴州、請功德山一行徒衆悉赴之。遂以幡花螺貝迎至。詣道場之夕、分選近上名德。入于公衙、其余并令散赴諸營禮懺。泊入營、悉鍵門而坑之。方袍而死者數千人。衙中只留功德山已下僧長、訊之。並是巢賊之党。將欲自二州相應而起、咸命誅之。」

(9) 譚正璧の「中国文学大辞典」(一九三四年光明書局刊)によれば、王仁裕の生没年は、八八〇年から九五六年である。

(10) 筆記小説の類に正確な地名を求めてもはじまらないが、この柳州宜章県という地名はおかしい。まず柳州は、唐から宋にかけての呼称で、今の広西壮族自治区の柳州市。一方、宜章県は、宋以降の呼称で、今の湖南省郴州に属する県名である。従って柳州宜章県というこの地名はおかしいが、郴字は柳字に似ているので、あるいは書きまちがえたものかもしれない。

(11) 「夷堅志」支乙卷五、黄巢廟の条、「柳州宜章黄沙峒、山勢險惡、(中略)山上有黄巢廟、不知何時何人所立、其前一杉木合抱。山下人每聞廟内声喏、若有数百人受令唯喏者、則峒民必嘯聚而叛。淳熙中、王宣子尚書為湖南帥、留意治寇。適有作乱者、命統制官楊欽領兵討平之、因発火箭焚其廟、且伐其樹。臨欲仆、有大黑蛇長丈許、頂上披髮、呀然躍出、為搏噬之状、衆環以弓矢射殺之。治其地為寨、以屯戍卒。金鼓之音、朝暮響震、自是一方獲寧。(以下略)

(12) 「輟耕録」卷七、黄巢地蔵の条。「趙生者、宋宗室子也。家苦貧、居閩之深山、業新以自給。一日、伐木溪澗、忽見一巨蛇、章質尽白、昂首吐舌、若將噬己。生棄斧斤奔避、得脫。妻問故、具以言、因竊念曰、『白鼠白蛇、豈宝物變幻邪。』即拉夫同往、蛇尚宿留未去。見其夫婦來、回首遡流而上、尾之、行数百步則入一巖穴中、就啓之、得石、石陰刻押字与歲月姓名、乃黄巢手瘞、治為九穴、中穴置金甲、余八穴金銀無算。(中略)自是家用日饒、不復事新。鄰家疑其為盜、告其姊之夫嘗為吏者、吏詢之嚴、不敢隱、随餽白金五錠、吏貪求無厭、訟之官。生不獲已、主一巨室、悉以九穴奉巨室。広行賄賂、有司莫能問。迨帥府特委福州路一官往廉之。巨室私獻金甲。因回申云、『具問本根所以、

実不曾掘発宝藏。其事遂絶。路官得金甲、珍襲甚。至任滿他適、其妻徒置榻下。一夕、聞繞榻風両声、頃刻而止。頗怪之、夫婦共取視、鏽鑰如故、啓籠、乃無有也。(以下略)。

(13) 「宋史」卷二〇五藝文志によれば、「僧史」二卷は、僧慧皎の著である。

(14) 「宋史」卷二〇三藝文志によれば、韋昭度撰「統皇王宝運録」十卷。(15) 今の陝西省安原市あたり。「説史方輿紀要」卷五十六陝西、漢中府興安州に「州北五里有牛山。高聳為群山之冠」と見える。

(16) 胡士鑿著「話本小説概論」(一九八〇年中華書局)頁七二に、「五代史平話」を宋人旧編元人増益せるものとする。

(17) 題目から察するに、この戯文は五代末の人史弘肇の出世劇だったと思われる。後世明末の馮夢龍が編刊した「古今小説」巻十五に史弘肇龍虎君臣会という作品を収めるが、ストーリーの点で何かつながりがあるのかもしれない。

(18) 孫楷第「日本東京所見中国小説書目」巻三では、内閣文庫本同小説について、「南宋」の序に云う「時に癸巳の長至、泛雪齋に叙す」(中略)癸巳は疑うらくは即ち万曆二十一年ならん。」として、孫氏は、この小説を、万曆刊本だとする。

(19) 杜信孚著「全明分省分県刻書考」(二〇〇一年線装書局 江蘇家刻卷を見ると、周之標(女性)が刊行した書として、1、「女中七才子蘭咳集」、2、「新刻出像点板增訂楽府珊瑚集」、3、「呉歎萃雅」、4、「周君建鑑定古牌譜」の四書が挙げられているが、このうちの2、3、4の三書がすべて天啓年間に刊行されたもので、1のみ刊行年不明としてある。尚、君建とは、周之標の字である。

(20) 「劉知遠諸宮調」では、李三娘が寝ていた劉知遠が一時一匹の金蛇に見えたので、ただ者でないと考え彼との結婚を考え、「古今小説」巻二十一「臨安里錢婆留筭跡」では、後に呉越王となる錢鏐は若い頃仲間の人によく自らが太トカゲである幻覚を与え、仲間より一目置かれていたことが書かれている。

(21) 正史「新唐書」などでは、黄巢を逆臣伝に入れ、彼の建てた大斉と

いう国を認めていない。

ところで、黄巢物語と宝剣の意味することについて、大塚秀高氏「劍神の物語―関羽を中心として―」（『埼玉大学紀要教養学部』第三十二卷一九九六年）では、宝剣を得後にこれを失う黄巢を下凡神だとする説が見られる。氏のこの論文は、中国における劍神に関する極めて広範囲に亘る考察で、その考察量の多さには大いに敬意を表するが、この下凡神説にはいささか同意しかねる。そもそも下凡神という場合、この劍神が天上において何か罪を犯していることが前提でなければならぬ。天上に罪を犯した為に、下界に下らねばならないのである。しかし、「演義」中の黄巢にこれがあてはまるか甚だ疑問と言わなければならぬ。もともと「宝卷」の場合は、黄巢を目蓮の転生だとし、その目蓮には已に八百万の冤鬼を勝手に地獄から解放させてしまったという罪があり、これが天上で犯した罪でこそないが、このようないわば原罪を有する「宝卷」中の黄巢ならば、これを下凡神と考えることも可能だろうが、すでに考察した通り、「宝卷」における黄巢の話は、恐らく後出のもので、本来の黄巢物語とは言えない。

（あらかし たけし 中国学科）

二〇〇六年十月十九日受理